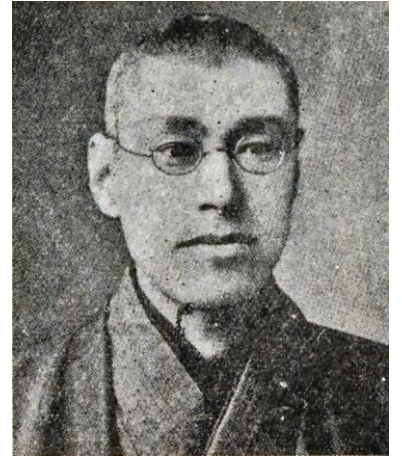


こんにちは！ 室長の工藤です。

昨日、10月15日から市民図書館内で歴史資料室が行っている展示、「わんどの図書館！—青森青年倶楽部図書館から120年」が始まりました。今回はこれに関連した話題をひとつご紹介します。

展示のサブタイトルにもなっている青森青年倶楽部図書館は、市内の青年有志によって組織されたもので、発起人のひとりに三橋三吾（1875～1944）という人物がいます。彼は水原衛作による公園築造（のちの合浦公園）の出納事務を担当し、水原没後の記念碑の発起人にも名を連ねています。三橋は文化事業の支援者であったことがうかがわれます。



三橋三吾
『青森市史』別冊人物編

そして、大正15年（1926）の地図から大町5丁目で「三橋醸造店」を営んでいることが分かります（現本町5丁目3番地附近）。

人名事典によると、三橋家は能登から青森に移り住み寛政年間（1789～1801）に醤油醸造を始めたとあります。屋号は「丸三」で大町にあったようです。私は藩政時代の青森町に関する史料をずいぶんと目にしてきたつもりではありますが、「三橋」という人物の記憶がありません。滝屋や藤林屋などの大^{おおだな}店に気を取られていたのでしょうか…。

さて、文化8年（1811）に成った「青森記」という記録では醤油醸造業が4軒記され、大町は宇兵衛と武十郎とあります。宇兵衛は滝屋宇兵衛とみられ、武十郎については目下人物を特定する情報を持っていません。

ところで、昭和30年（1965）発刊の『青森市史』別冊人物編の三橋三吾の項目に、青森に移住後の三橋家は「滝屋伊東善五郎家にわらじをぬいだ。それで屋号をもらって丸三、滝屋、三橋といった」という記述を見つけました。これにしたがうと、三橋家は滝屋との縁があるということになります。そして、屋号の丸三はやはり滝屋宇兵衛家のものであることも、安政2年（1855）に出版された「東講商人鑑」から判明しました。これには滝屋のほかにもうひとり「生醤油味噌」を生業とする大町の商人がいるのですが、三橋家ではなく沢屋藤兵衛と記されています。藩政時代の三橋家のなぞ解きは、これからの課題になりそうです。

また、明治8年生まれという三吾においても、水原衛作の公園築造の出納人として名を連ねた明治14年はまだ数えで7歳です。では、三吾の父親だとすればどうでしょう。彼もまた三吾が2歳の時に亡くなっているようなので（前掲『青森市史』人物編）、これに従うとやはり出納人になることはあり得ません。

青森県の公共図書館の設立運動を語る上で重要な三橋三吾ではありますが、その人物像等については再検証の余地があるようです。